



# 町民文芸

## 只見短歌会

七月詠草

大塚栄一

指導

高価なる補聴器買へども煩はしときをり使ふにいたく手間取る

古川 英子

炎天下自動散水の装置などに子は黙々ととり組みてをり

新国由紀子

夏草を取りつつ空を見上ぐれば秋あかね早も出でて驚く

馬場 八智

立籠める朝霧の中つき抜けて澄む鳥の声しばし聞き入る

小倉キミ子

水爆の実験ニュースに怒りたる被爆者の言葉に胸を打たれる

関谷登美子

眠れずに戸を開けをりて裏庭のひとつの蛍に見蕩れて居たり

渡部ゆき子

含ませば身震ひをする孫達に梅の実の良さ説く顔歪む

目黒 富子

時折はハウスの中に風入りてトマト挽ぎゆく顔の涼しき

渡部ヨリ子

声に出し唄へぬわれは懐かしき昭和演歌の歌詞めぐりあつ

新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会

八月例会

目黒十一

指導

やかましい蝉が邪魔する昼寝時

信

観音の寝たる姿や雲の峰

光るとき風の音聞く螢かな  
見えていてすぐに消えゆく梅雨の山

順子

いつまでも慣れぬ正座や夏座敷

都

汗ばみて右左へと鍬を引く

夕立や同級会の相合傘  
太過ぎしキュウリどっかど流し端

修一

夏帯に母想い黙す帯戸の間  
朝顔の庭隅に咲くこぼれ種

味代子

初トマト神仏に上げ朝餉かな  
籠編む草軒に吊して土用入り

一穂

一と品は散歩の折りの夏葎  
別荘と言ふ夏草叢の中にな

礼

